早稲田商学第403号
2005年3月

資　料

スウェーデン国立銀行「スウェーデン国立銀行の300年」(訳)

立　脇　和　夫

Ⅰ．1668年以降300年間のスウェーデン社会

1668年にスウェーデンは，政治的にも軍事的にも最高潮に達していた。その10年前に，スカンジナビア半島の南部諸地域がスウェーデン王国に組み込まれ，バルチック海及びドイツにおける長い一連の戦勝の結果，バルチック海は実質的に，スウェーデンの内海となっていた。周辺の諸国はスウェーデンの軍事力に恐れをなしていた。

しかし，スウェーデンは一小国に過ぎなかった。スウェーデン固有の人口は100万人弱であったが，これらの人々が，外国人傭兵も含めて，強国（Great Power）としての国際的地位を保持していた。その都市は小さく，全人口の恐らく５％程度を有していたであろう。1668年までに，ストックホルムは首都となり，その人口は５万人から５万5000人の間であった。国民の90％は農業に従事していた。輸出は比較的少額で，品目は主に鉄（年産およそ２万5000Mトン），銅，タール及び板であった。占領地域における課税収入，および，上記の輸出によって得る外貨は，スウェーデンに必要な輸入品（主に塩と繊維）の支払い及び海外における各種支出をまかなうのに十分であった。

対外的拡張は，広範囲にわたる社会的変革を惹起し，さらには政治的結末を

招来した。人口の80%以上は農民であったが，それは，彼らが自分の耕す土地を所有していたことを意味しない。事実，その25～33%が土地を所有していたにすぎない。残りは，王室あるいは貴族の所有する土地を耕していたのであり，それが全農地のおよそ75%に達していた。また，土地の抵当権設定や贈与により，王室の広い範囲の土地が貴族，とくに上層の貴族――当然にそこから官吏が登用された――の手に渡った。それに加えて，自作農に対する政府の課税権が，貴族へ大幅に移譲された。こうした措置の結果，農民の生活条件が悪化したか否かは不明だが，しかし疑いもなくとはいえないまでも，スウェーデンの農民が，伝統的な独立性を失う大きな危険にさらされていたとは考えられない。さまざまのカテゴリーの農民の区別，即ち，大きな農場で働く農民，貴族の所有する土地を耕す農民，単に貴族に税金を納めるだけの農民，といった区別は消失し始めていた。同時に，農奴制の存在する外国との接触から影響を受けて新しい思想も生まれてきた。これは，主にドイツ及びバルチック海域から貴族に流入したみられる。結局，スウェーデン国民の大多数を占める農民の保護は1617年の議会法（Act of Parliament，原語は Riksdag Act）に規定された農民の伝統的自由を明示的に確認することであった。この法律は，農民，より正確にいえば，税金を納めている自由な自作農を，スウェーデンの政治活動の面で有力な集団とし，上層貴族の中で最も有力な分子に対する闘争に備えて，社会における他のグループ（主に下層貴族）との結束を促した。1680年代及び1690年代にこの勢力の結合は，国王をして，貴族の政治的・社会的影響力を著しく削減させることを可能にした。たとえ，この行動で喪失したすべての権利を回復できなかったとしても，「国際的パターン」に倣うスウェーデンの社会的発展がもはや危険を伴わないことを保証するものであった。

100年下って，1768年には，あらゆる面で変革がみられた。それらの変革は，概して17世紀の強国の時代（Great Power Era）の，あるいはスウェーデ

ンが少なからず強国としての地位を究極的に喪失することとなった，18世紀初頭の北方戦争中の出来事の結果であった。国民の80～85％が依然として農業及び関連分野に従事している状況にあった。出生率は著しく上昇し，総人口はおよそ200万人に増大した。スウェーデン政府が世界の強国政治への参入を数回試みて失敗したことを別とすれば，政府の政策は国内の経済発展を指向し，輸出と国内産業の育成に大きく重点をおくものであった。鉄の輸出は年間約５万トンに達した後，この水準で停滞していた。その原因の一半は外国との競争激化にあったが，スウェーデンの製鉄業者が意図的に供給を制限したのも事実である。板とタールは依然重要な輸出品であった。輸出代金収入は外国からの輸入品，特に穀物代金支払いに充当された。こうした関連を単純化していえば，利用可能な諸資源をもはや戦争にファイナンスする必要はなく，代わって急激に増加する人口を賄うことができたのである。

しかしながら，人口増加は，やがて社会面で明らかに広範囲の変革を伴うものであった。旧式の収奪農法は次第に廃止され，農業はより生産的になった。しかし，これと並行して，諸階級が相続によって分裂し，新しい，しばしば限界的な土地の利用がある程度増加した。こうした展開に伴って，増大する貧農と土地を全く持たない集団を出現させた。それと同時に，商人，鋳物製造業者，あるいは他の「平民たち」のグループの影響力を増大させていった。新たな社会的・政治的対立がおこり，それによって，次第に貴族，聖職者，市民，農民という旧い階級社会の崩壊への軌道が敷設された。こうした対立は，1719年の「自由の時代」(Era of Liberty) の始まりから，1792年の国王グスタフⅢ世の死去に至る間にみられた激しい政治闘争に極めて鮮明に表われていた。

さらに100年下って，1868年に，階級社会は政治的に消滅した。これは，1866年の代表者会議 (Representative Assembly) の改革によって達成された。これによって，かつての４階級の代表制に代わって，２議院制の議会 (Parlia

ment，原語はRiksdag）が実現した。総人口は，出生率が上昇しないのに，20～30年間増加し続け，400万人を突破した。実際，出生率は低下した。しかし，それ以上に，馬鈴薯の栽培を中心とする食糧供給の改善，及び天然痘の予防接種の普及など医学の進歩によって，死亡率が低下したのである。しかしながら，支払われた代償も高価であった。生活水準の低下を余儀なくされる人々が増大し，財産のない人々は無数にふえ，失業者や半失業者が増大した。当時，人口の70％が農業及び関連産業に従事していた。この農村人口のたかだか半分が土地所有者であり，その多くは小さな，やせた土地を耕す貧農で，残り半分は零細小作人や召使いであった。

工業化は，スウェーデンにおいては，1870年代には未だ準備段階にあり，真に大々的な発展が始まったのは1890年代後半になってからであった。農業の状況が産業の拡大を加速させる促進剤となったのは疑問の余地がない。新しい産業が必要とする労働力の供給は十分であり，工業化が進むと，いわば社会的に絶望的状況から多くの人々を救出するのに丁度よいタイミングだったのである。今一つの逃避ルートは海外移住であった。1860年から1910年の間に，100万人のスウェーデン人が生まれ故郷を離れた。その目的はアメリカ合衆国で財産を築くことにあったが，また同国における宗教的・政治的自由を求める狙いもあった。当時，それはスウェーデン当局によってしばしば否認されていたからである。

代表者会議の改革を通じて出現した新しい勢力集団は，自由の時代以降拡大を続け，今や強化された中産階級に所属していた。しかしながら，議会においてこの階級のもつ政治力は富裕な農民を代表する人たちと分有されていた。投票規則では不動産の所有権が政治的に大きな利益となった。これは，社会の工業化が進むときにしばしばみられたが，非常にゆっくりと消滅していった。1909年に成年男子普通選挙制が導入された。その時，やっと社会における新しい集団――主に新しい工場労働者階級――がスウェーデンの政治の動きに影響

を与え始めたのである。

それまでの約40年間に，スウェーデン社会には非常に大きな変革が生じた。大量の海外移民があったにも拘らず人口は550万人に膨脹した。国民の僅か半分が農業及びその関連分野に従事しており，増加した人口の全てが工業，商業，通信のほか公務員及び自営業に吸収されたのである。農業及び関連産業に従事する人数が実際に減少し始めたのもこの頃である。都市が人口の25％を占め，その他の人口密集地域が40％を占めた。今日の経済的・社会的構造の骨格がこの頃出来上がった。国内の鉄鉱石埋蔵量と森林が輸出の基盤を形成した。スウェーデンには独自の発明あるいは新しいデザインに大きく依存しているエンジニアリング工業があり，それが大工業国の大量生産方式と競争できる強みとなっていた。国内消費財産業はあらゆる分野で非常にうまく育成された。

労働組合運動と社会民主々義を通じて，増大する工場労働者階級は，組織的安定性と産業上・政治上の勢力を確立しつつあった。社会改革へ向けた第１歩が印されたが，それはごくわずかな範囲にとどまっていた。政治体制も，複数の政党が全国的に組織されるなど，近代的な形を整えつつあった。しかし，貧困はなおも広範囲に存在し，富と所得のパターンは著しく調和を欠いていた。失業は恒常的な天罰に等しかった。

この状況は，1920年代及び1930年代を通じて存続し，とくに大不況期において顕著であった。しかしながら，同時に，新しい積極的な経済・社会政策が奏功して不況は転換点へと向かった。これは，1930年代に開始された近代的なスウェーデン福祉国家政策の第１歩を可能とした。急速に上昇する生産に基礎をおくこの過程は，1940年代及び1950年代の目覚ましい成功で最高潮に達した。スウェーデン福祉国家はなお完成に程遠く，おそらく将来も完成することはなかろう。福祉国家においても，複雑な経済的・社会的問題があり，バランスの問題はとりわけ重要である。しかしながら，これらの問題は，それぞれ固有のダイナミズムを有している。変革のペースは非常に速く，われわれが，新しい

異なったものに再び対峙するまえに，現状を認識するために立ち止まる時間をかろうじて持てるにすぎないのである。

Ⅱ．スウェーデン国立銀行創立後の300年間

(1)スウェーデンの銀行前史

大法官，Axel Oxenstierna 伯爵が，スウェーデンで初めて近代的銀行の設立を提案したのは1619年のことであった。彼は，1635年に再びこの計画を提出したが，こうした計画を実現するのに未だ機は熟していなかった。1646年に外国人の会社がスウェーデンにおける銀行営業を認められたが，この認可は活用されなかった。1652年に二つの提案が提出されたが何れも良い反応を引き出せなかった。その一つは財務省（kammarkollegiet）によるものであり，いま一つは，ヨハン・パルムストルック（Johan Palmstruck）の提案で，アムステルダム銀行（Bank of Amsterdam，1609年設立）をモデルとしたものであった。

パルムストルックは，当時スウェーデンの属領であったリガ（現在，ラトビアの首都＝訳者）に生まれた。1655年，彼は再びスウェーデンに近代的銀行を設立する計画を提出した。

(2)パルムストルック銀行

パルムストルックの提案は国王の認可するところとなり，1656年11月30日，融資銀行（lending bank）と為替銀行（exchange bank）を設立するための勅許（Royal licence）が，ヨハン・パルムストルック及び彼の共同経営者並びにそれらの後継者らに付与された。勅許の中の融資銀行と為替銀行という言葉は二つの別個の銀行を意味するものではなく，それぞれの機能は，今日の銀行の融資部及び預金部の果たしているものに似たものであった。この銀行の名称はストックホルム銀行（Stockholm Bank，原語は Stockholms Banco）であったが，その後，その創立者の名にちなんで一般にはパルムストルック銀行

(Palmstruck Bank，原語は Palmstruchska banken) と呼ばれた。

形式的には，パルムストルック銀行は私企業であったが，政府の対応措置の結果，初めから一種の政府機関 (Government Institution) の性格をもっていた。かくて，国王の任命書により，パルムストルックは，この銀行の総支配人 (managing director) となった。彼を補佐する3人の支配人 (managers，原語は bankokommissarier) は，貴族，ストックホルム公吏，及び市民から1人ずつ選ばれた。これらの支配人は政府により任命された。銀行の純利益の半分は国王に帰属し，残り半分がストックホルム市と銀行関係者で均等に配分された。1659年，政府は銀行の監査役を任命した。

融資部門を通じて，パルムストルック銀行は動産・不動産を担保とする貸付が認められた。また，為替部門を通じて，同行は，当時スウェーデンに流通していたさまざまの通貨を預金として受け入れた。これらの資金は，当時預金者によって現金で引出し，あるいは小切手の振り出しによって第3者へ移転させることが可能であった。

当初，パルムストルック銀行は好調に滑り出した。しかし，1660年に，当時，スウェーデンにおける主要な支払手段であった銅貨 (原語は kopparplåtmynt) の鋳造に変更が加えられ，この種の通貨を大量に預金として受け入れていたパルムストルック銀行は危機に陥った。従来，75ダラー (daler) に鋳造されていた純銅136kgが，その後，90ダラーの銅貨に鋳造されることとなったからである。同一券面額の古い銅貨は新しい銅貨より銅の含有量が多く，素材価値において勝っていた。その結果，古い銅貨を鋳潰して輸出すれば，利益をあげることができた。このため，預金した資金を引き出す銀行取付けが発生した。銀行は貸付金の回収によって必要な営業資金を確保しようと努めたが徒労に終わった。新しい銅貨を大量に鋳造するのに十分な時間がなかったのである。

こうした状況下，パルムストルックは，姿を消してしまった銅貨に代わっ

て，広く流通する支払手段を創出しようと考え，1661年，信用紙幣（notes of credit，原語は kreditivsedlar）と称するものを創出した。その紙幣は，持参人払方式で，券面は端数のない固定金額で，しかも無利子であった。かくして，この紙幣は，今日的意味での銀行券となり，したがって世界における銀行券の嚆矢となったのである。

当初，信用紙幣は非常な好評をもって受け入れられ，ときには銅貨に比してプレミアム付きで交換された。しかし，信用紙幣による貸付にあまりにも寛大であったため，やがて支払いが困難になってきた。1663年の秋に，この紙幣の兌換及び預金の払戻しができないことが判明した。その結果，一般に流通していた信用紙幣は大幅に割り引いて使用された。政府は問題を調査するため委員会を設置し，同委員会の勧告に沿って，銀行に貸付残高を回収し，流通している信用紙幣を償還することを命じた。その後，銀行による新規の貸出は行なわれなかった。1664年に新たに査問委員会が設置され，1667年に報告書が提出された。それによると，銀行の会計処理には十分な注意が払われておらず，しかも相当額の現金の不足が判明した。パルムストルックは銀行の損失の責任をとらされた。彼は死刑を宣告されたが，刑は執行されなかった。

(3)スウェーデン国立銀行（リクスバンク）

［絶対王制時代］—1668～1718—

1668年，議会の過半数が，スウェーデンにおいて銀行を存続させることに同意した。議論は，主として，それをどういう形で実現するか，という方法論に集中した。1668年9月17日，新銀行を国内の諸階級で構成されるスウェーデン議会の全面的監督下におくことが決定された。新銀行は，当初「王国の諸階級の銀行」（Bank of the Estates of the Realm，原語は Rikets Ständers Bank）と命名されたが，後にスウェーデン国立銀行（National Bank of Sweden，原語は Sveriges Riksbank 以下，両者とも新銀行またはリクスバンクと略称する）と

改められる。このため，新銀行の性格は議会の機関（parliamentary institution）のそれであったし，これは今日に至るまで大きな特徴となっている。新銀行の設立に関して諸階級の行なった決定――後に「1668年銀行条例」と呼ばれる――は諸階級，即ち，貴族，聖職者，市民の各階級の代表者によって確認された。農民階級は，この銀行に関する議論に参加しなかった。

新銀行は，形式上，パルムストルック銀行を継承したものではなく，法的にも後者の資産，負債はもとより，その建物やスタッフも継承していない。

新銀行は6人の理事（directors，原語は bankofullmäktige）――貴族，聖職者，市民の各階級から各々2人づつ選出――によって運営された。1681～1698年間は，各階級から1人づつ選出された3人の理事がいたが，1698～1747年間は，以前のように各階級から2人づつ選出された。理事会（Board of Directors）の機能は，新銀行及びその活動に関するトップ・レベルの監督を行なうこと，及び同行の支配人（managers）に対する勧告を行なうことであった。支配人たちも，また，上記の諸階級から2人づつ選任された。すなわち，支配人のうち，2人は貴族であり，4人は平民であった。支配人たちは銀行の支配人会同（board proper）を形成するものの，彼らが意図した独立性は与えられなかった。彼らは，単に銀行の日常業務を委託されただけで，これは新銀行の運営をいくらかやり難いものとした。同行の運営は基本的に3種類の会議，即ち支配人の会議，支配人と理事との合同会議及び理事の秘密会で討議された。

諸階級に代わり，リクスバンクの活動は議会の銀行委員会（Banking Committee）の統制下におかれた。1668年の議会では，この委員会は特別委員会であったが，1672年議会以降は三つの階級から選出された委員で構成される常設委員会となった。それ故，平民は，議会の銀行委員会における多数派であった。まことに奇妙なことであるが，この委員会は理事会の決定を審査する立場にあったにも拘らず，銀行の理事は銀行委員会の委員でもあった。17世紀末及び18世紀初めは，長期間存続する議会の特別査問委員を諸階級が任命するのが

しばしばであった。

1668年銀行条例にも，他のいかなる法令にも，新銀行が独自の資本をもつべきであるとする規定はなく，何らの払込みもなされなかった。新銀行の運転資本は受け入れた預金及び留保利益でまかなわれた。今日的意味ではそうした利益は架空のものであり，減価償却も除却もなされなかったので，不良債権さえも名目的価値で記帳された。新銀行の運転資本の増強と収益機会の獲得のため，政府は1668年に王室の流動資産を新銀行へ預託すべきことを決定した。また，1668年以降，新銀行は王室で保有していた大砲の輸出の取り扱いを行なった。同時に，ストックホルムの王立造幣局の経営が同行へ移管され，それにより，新銀行は貨幣鋳造益を得ることが可能となった。1674年に，新銀行は大砲の輸出を扱う権利を放棄した。

パルムストルック銀行の挫折は，主として信用紙幣（note of credit）の発行に起因するものと考えられた。それ故，1668年銀行条例によって，リクスバンクは信用紙幣や類似の他の証券類を発行することを明示的に禁止された。しかしながら，面倒な銅貨よりも，もっと便利な支払手段が流通界において必要とされた。このため，銀行条例の禁止規定にも拘らず，銀行内部の証書が支払手段として一般に流通するようになった。その一つは預金者によって発行され，リクスバンクの経理局長によって承認された小切手（approved check）であり，今一つは現金紙幣（cash note）即ち同行の出納局長によって発行された預金証書（deposit receipt）及び同行の経理局長が出納局長にあてて発行した為替証書（payment order），であった。リクスバンクの外におけるこれらの証書の流通を阻止するため，特別銀行委員会により，1701年に移転紙幣（transfer notes，原語はtransportsedlar）が，新たな支払手段として広く利用されることを意図して，導入された。リクスバンクに預金——銀貨100ダラー以上の預金——をした者は，そうした移転紙幣を取得することができた。これらの移転紙幣はある所持人から他の人に譲渡するときには裏書きが必要であった。こ

の規制のため，及び最低金額のため，この移転紙幣が広く流通する支払手段となるのに非常に長い年月を要した。

パルムストルック銀行と同様，リクスバンクに為替部門（exchange bank）と融資部門（lending bank）の二つの部門が設けられた。為替部門は，当座勘定に無利子預金を受け入れた。正式には，為替部門で受け入れた資金は，貸出せないことになっていたが，一定額の貸出しは行なわれた。融資部門は6週間前の予告を必要とする利付6か月定期を受け入れた。預金証書は貸付の担保として利用された。

リクスバンクは動産・不動産を担保に貸付を行なったが，抵当貸付が最も重要であった。また，貸付の担保には金，銀，宝石，あるいは銅，錫，真鍮，鉛のような卑金属，さらには砂糖，塩，穀物，ピッチやタールのような需要の大きい輸入品が供された。個人保証のみによる貸付は行なわれなかった。

リクスバンクが業務を開始した日から，王室は活発な借り手であった。戦時には，王室の要請によりリクスバンクはしばしば困難な状況に陥った。たとえば，1670年代後半におけるデンマークとの戦争中がその好例である。

1680年代末に向けて，貨幣が潤沢だった時期がある。1691年に融資部門は預金の取扱いを停止した。そのため，資金は今度は為替部門の無利子預金へと向かった。リクスバンクの利益が減少したので，理事会は貸出を増加させるべく努力した。貸出業務は拡大され，スウェーデンの製鉄所への融資も行なわれるようになった。ファルム，グーテンベルク及びオレブロに支店が開設されたが，それらは非常に短命であった。貨幣の流入をチェックするための預金金利引下げの可能性は，あまり当時の人々によって評価されなかったようである。唯一の解決策は銀行預金の取扱いを中止することである，と理事会は考えた。抵当貸付への集中はリクスバンクの融資活動を極めて適切なものとしていた。同行は商工業との接触は非常に少なかった。

1700年の危機が遠ざかると，融資部門の預金受入れが再開されたため，潤沢

な貨幣供給が続いた。リクスバンクは，適切であるとみられる時にのみ預金を受け入れる，という原則が設定された。貨幣供給が不足するとき，貸付は停止された。

1709年にロシアのポルタバ（現在はウクライナの都市＝訳者）におけるスウェーデン軍の敗北が伝えられた後に，劇的な変化がおきた。預金者は自己の預金を引き出そうと銀行へ殺到したが拒否された。リクスバンクは，王室へ新しい貸付を供与することを余儀なくされていたからである。同行は融資部門の預金に対して利子を支払い，また為替部門の預金払戻しを行なうのに十分な現金を用意することによって，一般の人々が失った銀行に対する信頼を回復することに努めた。しかしながら，リクスバンクはときどき為替部門の預金払戻しを停止せざるを得なかった。しかし，為替部門の信認は決して損われることはなかった。その理由は，承認小切手と現金紙幣が便利な支払手段として広く一般に流通していたからである。

1668年から1680年まで，リクスバンクはストックホルムの旧市街北部Oxenstierna宮殿の一角を借りて営業を行なっていた。1680年2月に旧市街南部に特別に建てられた新しいビルに移転した。それ以降，1906年まで226年間，そこで営業を続けていた。

［自由の時代］—1719～1776年—

1719年，スウェーデンにおける絶対王制が崩壊した後，為替部門のみが事実上業務を再開した。融資部門は事実上預金業務も貸出業務も停止した。

移転紙幣は，1722年に最低金額が銅貨50ダラーに引き下げられてから，人気が上がり，1726年には租税など政府への支払いに法貨として扱うことが宣言されて以来，人気は一段と高まった。しかしながら，一般に公衆は，それらの紙幣の裏書き要件を無視していた。

やがて，商工業を支援するために，リクスバンクの貸出需要が増大した。

1738～1739年の議会において，ハッツ（Hats）と称する政党が政権を獲得した。彼等の経済政策は本質的に重商主義者であり，その会期において諸階級はリクスバンクの商工業向け貸出を大幅にふやすべきであると主張した。パルムストルック銀行が貸出活動を積極化した場合のように，流通銀行券が豊富に出回り，やがて金属貨幣の不足が各界で囁かれるようになった。かくて，銀行券に対する信認は失墜した。

王室の貸出要請もまた増大し，リクスバンクは，1741～1743年間のロシアとの戦争にファイナンスしなければならなかった。銀行券インフレの一つの帰結は，1743年にリクスバンクが36ダラー及び24ダラーの銅貨と兌換できる移転紙幣の発行を始めたことである。これらは，同行が初めて発行した固定券面額の紙幣であった。1745年にリクスバンクは12，9，及び6ダラーの銅貨兌換券の発行を開始した。これらは裏書が必要でなかったが，やはり移転紙幣と呼ばれた。同時に，政府は，銀行券はあらゆる支払いに法貨として使用できる旨定めた。これに関連して，リクスバンクからの銅貨の流出は制限された。スウェーデンの通貨は紙の通貨（paper currency）に変わり，そして長く続いた。リクスバンクの金属保有を増加させ，かつ流通している移転紙幣の量を減らすために，同行理事会は融資部門の預金業務の再開を決定した。しかしながら，王室への新規貸出は増加し，銀行券の流通高は再び増加した。1757～1762年間の対プロシア戦争は，主にリクスバンクによりファイナンスされた。

この間，1747年に銀行の建物内に特別の銀行券印刷所が設置され，また，1755年に，ストックホルム南方20キロにあるタンバに独自の製紙工場も建設された。

当時，スウェーデンにおけるいま一つの政党であるカップス党（Caps）は，1765～1766年の議会において政権を獲得した。彼らは，ハッツ党とは異なり，インフレ的な金融政策に強く反対し，ハッツ党の楽観的な貸出政策を徹底的に拒否した。

［1777年の通貨改革から1834年改革まで］

1772年の国王グスタフⅢ世によるクーデターの後，リクスバンクに対する統制力は，諸階級から国王及び輩下の財務大臣 Johan Liljencrantz 男爵の手に移った。為替政策がリクスバンクの主要な関心事となり，貸出政策の重要性は2次的なものとなった。

1776年末に，1777年以降リクスバンク銀行券は銀貨と兌換されねばならないが，それらは50%減価されることが決定された。国王は，リクスバンクの要望に反して，この改革を主張した。その後，リクスバンクにより発行された銀行券はリクスダラー（riksdaler）と表示され，要求に応じて銀貨と交換された。交換のため提示された銀行券はほんの僅かの額で，通貨改革はリクスバンクの現金準備に何ら重大な緊張を惹起することなく遂行された。1779年銀行法（Bank Act of 1779）は，銀行券の後盾について，初めて規定を設けていた。それは，リクスバンクに対して現金準備と銀行券発行高の比率を3対4に保つことを要請していた。

諸階級は，1779年の議会において，上位3階級から3年ごとに任命される監査役（parliamental auditors）がリクスバンクの経営を調査することを決定した。

1777年の改革で回復したスウェーデンの通貨制度上の秩序と安定性は，1789年に妨害された。ロシアとの戦争は，王室の借入需要を膨脹させた。議会の銀行委員会はリクスバンクは政府に対して金融支援を与えるべき義務を十分果していると主張していた。こうした状況の下で，議会は国債庁（National Debt Office）を設立し，やはり自らの支配下に置いた。国債庁は，政府の支払いに利用される利付の契約紙幣（promissory note）を発行した。それらの契約紙幣が無利子の不換紙幣に転化するのに長い時間を要しなかった。それらは間もなく，商業界一般に支払手段として広範囲に使用されるところとなった。それは兌換不能であったので銀貨及びリクスバンク銀行券に対してはつねに割引かれ

ていた。リクスバンク銀行券は銀貨との兌換ができたからである。かくて，一時期，兌換可能な銀行券と兌換不能の紙幣が並行的にスウェーデンで流通していた。これは大きな混乱を惹起し，新たな通貨改革を行なって秩序を回復することが必要であった。国債庁の契約紙幣は償還されたものの，50％割引かれた。リクスバンクは，国債庁の1.5リクスダラー（riksdaler riksgäld）に対して，自行の1リクスダラー（riksdaler banco）を支払った。この改革を通じてリクスバンク銀行券と国債庁の紙幣との間の固定的な価値関係ができ上がり，これは国債庁のその後の発行分にも適用された。新しい通貨改革はリクスバンクに何ら困難を来たすことはなかった。1800年の議会以降，農民階級もまたリクスバンクの理事会に代表を送り，1866年の議会改革まで，四つの階級が，それぞれ3人ずつ，理事を選出した。

1808～1809年の対ロシア戦争にファイナンスするため，リクスバンクは，政府のためにクレジット・ラインを設定した。やがて，リクスバンクは，銀行券の兌換停止を余儀なくされた。スウェーデンの通貨は，再び紙の通貨となった。しかしながら，通貨の券面金額は紙幣の兌換を再開することによってのみ，効果的に維持できたと考えられる。1822年に銀行券を実勢レートによって兌換すべきであるとする，財務委員会（Finance Committee，旧銀行委員会）の勧告に従って，1830年に，兌換は，1リクスダラー銀貨に対して，2⅔リクスダラー紙幣の割合で交換すること，即ち，紙幣を62.5％減価させることが決定され，1834年に実施された。リクスバンクの発行した銀行券はその後，リクスダラー或はスキリングス・バンコ（skillings banco）と表示された。

18世紀末にリクスバンクの貸出活動は非常に限られた規模にとどまった。農業への貸付は抵当貸付（mortgage loan）の形で行なわれ，一方，鉱山業へはスウェーデン製鉄親方組合（SIMA）への信用供与を通じて資金援助が行なわれた。その他の産業分野への貸付はスウェーデン製造業者基金への信用供与を通じて実施された。貸付は鉄棒，鉄製品，その他の輸出品を担保として行なわれ

た。民間の個人は金及び銀製品を担保に貸付を受けた。1800年に貸出に劇的な変化が生じた。この年，国立割引庁（National Discount Office）と呼ばれ，形式上独立しているが，実際には，リクスバンクの一部局であった組織を通じて割引業務が開始されたのである。国立割引庁は担保付または個人保証により短期貸付を行なった。

1830年代に，民間銀行（private banks）制度がスウェーデンで創設された。これら民間銀行も銀行券を発行し，程度の差はあっても，自己流の考えに基づいて行動していたが，やがてこれが合法的なものとなった。彼らは，銀行券発行の裏付けとして，リクスバンクへ預入した資金を充当することが認められた。かくて，リクスバンクは「銀行の銀行」（Bank of the Banks）となったのである。

［1834年の通貨改革から1897年リクスバンク法制定まで］

1834年の通貨改革は，当時流通していた3種類のリクスダラー，即ち riksdaler specie, riksdaler banco, 及び riksdaler riksgälds の何れをも排除しなかったが，それらの相互間の価値関係は固定された。1855年まで，スウェーデンの通貨に統一的単位は存在しなかったが，この年，統一的単位は National Currency riksdaler（原語は riksdaler riksmynt）と名付けられた。それは riksdaler riksgälds と等価とされた。

リクスバンクの貸出政策は多様化と合理化へ向かう動きによって特徴づけられる。それは，リクスバンクが，今日的意味で，一国の中央銀行の方向へ向かっていたことを意味していた。そのため市場性の高い証券を担保とする短期貸付を行なうべきであり，また信用政策の手段とするため債券残高を保有すべきである，と考えられた。為替手形の割引を通じる信用供与が19世紀の中葉に始められた。しかしながら，リクスバンクの業務遂行は煩雑であり，とくに金利はほとんど固定されているか，または非常に狭い範囲で変動するにすぎな

かった。割引政策による為替レートへの影響は未だ知られていなかった。

1866年の議会改革によって，王国の4階級は廃止され，議会に上院と下院が設けられた。1867年に，リクスバンクは王国の諸階級の銀行（Bank of the Estates of the Realm，原語はRikets Ständers Bank）からスウェーデン国立銀行（National Bank of Sweden，原語は Sveriges Riksbank）と改称され，今日に至っている。

1873年に，デンマークとスウェーデンは，金を基礎とする通貨単位・クローネをもつ，スカンジナビア通貨同盟を創設した。1875年に，ノルウェーもこれに参加した。リクスバンクの銀行券は銀貨ではなく，金貨と兌換できることとなった。

1840年代以降，民間銀行の銀行券発行権限に関する議論がおこってきた。この権利を支持する人々は，銀行券発行は民間の銀行業務にとって不可欠であると主張した。一方，反対論者たちは，私企業が銀行券発行によって利益を得ることは容認できないと考えた。1897年に，リクスバンクは，スウェーデンにおける唯一の発行銀行となった。民間銀行の銀行券発行は1903年から停止され，流通していた民間銀行券は回収されることとなった。

1890年代に，リクスバンクの預金は，銀行券発行権をリクスバンクが独占することと関連して，意図的に制限された。リクスバンクは，当時なお相当量の貸付を行なっており，全国銀行の貸出総額の約15%を占めていた。民間銀行はリクスバンクからの借入れを始めた。しかし，依然，最大の借り手はストックホルムの大企業であった。

リクスバンクは，1824年にグーテンベルク及びマルモに，また1851年にビスビィに支店を開設した。19世紀の後半に，リクスバンクは全国に支店網を構築した。

[1897年のリクスバンク法制定以後]

民間銀行が銀行券発行権限を放棄して以降，リクスバンクは利付預金の受入れを停止した。その貸出政策は主に短期貸付を供与するように改められた。そして，割引業務が増大した。民間発行の手形の割引が1879年から開始された。リクスバンクの一般企業向け貸出は廃止された。1896年に設立された銀行間決済制度は，1899年にリクスバンクにより運営されることとなった。

19世紀から20世紀への変わり目に，リクスバンクを中央銀行に改革するための作業は概ね完了した。

第1次世界大戦が勃発すると，大量の銀行券が金貨との兌換のため提示された。1914年の勅令により，銀行券の金兌換は追って通知があるまで停止された。金・銀の輸出禁止措置が実施された。外国為替の不足が見込まれ，重要物資の輸入のために外国為替の割当が叫ばれた。しかし，外国為替は過剰となり，1916年にリクスバンクは銀行券の金兌換を再開することができた。兌換は1920年の春まで続けられたが，同年に発生した大量の金流出により，兌換は再び停止された。1924年に金兌換が再開され，金輸出も解禁されたが，金の輸入禁止措置が導入された。

1931年夏の厳しい世界的危機の後，銀行券の金兌換は再び停止を余儀なくされた。1931年9月，リクスバンクは銀行券の金兌換義務を一時的に免除され，この免除措置が一年間続いた。その時，金輸出禁止措置が再度導入され，その後も実施されている。

[20世紀のリクスバンクの組織と活動]

300年昔と同様，今日もリクスバンクはスウェーデン議会（Parliament，原語はRiksdag）によって保証され，専ら統治されている（Riksbank is guaranteed and governed exclusively by the Riksdag)。リクスバンクの監督は議会により，具体的には，その財務委員会及び議会の任命した監査役によって行なわ

れている。

リクスバンクは，7名から成る理事会により運営されている。1897年以来，議長と理事代理1名は政府により任命されており，7名の理事と7名の理事代理は議会によって選出されている。理事会はリクスバンクの総裁及び副総裁を任命する。総裁は理事会メンバーの中から選出される。

リクスバンクの日常業務は，総裁，副総裁及びその他理事から構成される理事会によって運営される。リクスバンクの製紙工場及び印刷工場の運営に関する諸問題は，別途，工業委員会（Industrial Board）によって処理される。為替管理の運営は為替管理委員会（Exchange Control Board）により行なわれている。

リクスバンクの職務は，議会により決定された一般経済政策の枠組みの中で，通貨・信用政策を決定し，実施することにある。この点に関して，リクスバンクに利用可能な，最も重要な政策手段は割引歩合政策，為替政策，公開市場操作，民間銀行の現金準備に関する指示，民間銀行の貸出態度に関する勧告及び最後に，債券発行の統制がある。

リクスバンクは，スウェーデンにおける支払手段，主に銀行券の供給に関しても責任を負っている。1809年の法律（Constitution Act of 1809）に記されているように，リクスバンクは，王国内における支払いに際し，法貨として扱われる銀行券の独占的発行権を保持している。

リクスバンクは民間銀行へ貸出を行ない，また，銀行間の決済を処理している。

リクスバンクは，スウェーデンの金及び外貨準備を管理し，為替管理を担当している。同行はまた，ワシントンの国際通貨基金（IMF）及び国際復興開発銀行（IBRD），及びバーゼルの国際決済銀行（BIS）などの国際機関と接触を保つ責任がある。

リクスバンクは政府の銀行として機能し，政府系機関の余剰資金の管理・運

用に当たっている。また，同行は多数の政府貸付基金の貸付金をも管理している。

1906年10月に，リクスバンクはHelgeandsholmenの建物へ移転した。それから70年後の1976年4月，リクスバンクはストックホルムのBrunkebergstorgにある現在のビルに移転した。リクスバンクの印刷工場は，現在ストックホルム南方にあるAB Tumba brukの建物の中にある。

今日，リクスバンクはストックホルムの本店で業務を行なっているが，地方に23の支店を設けている。(立脇和夫訳)

[訳者あとがき]

本資料は，訳者が2004年9月，スウェーデン国立銀行（リクスバンク）を訪問した際に入手した英文資料 "Sveriges Riksbank 1668-1968, Tumba, Sweden, 1978" を翻訳したものである。執筆者名は明記されていないが，リクスバンクの印刷所で印刷されている点からみて，同銀行関係者の執筆したものと思われる。リクスバンク関係者によって執筆された英文文献は非常に少ないので，ここに訳出した。

ただ，原資料が執筆されたのは1970年代後半であり，その後の四半世紀間に大きな変革が生じている。例えば，1979年の憲法改正でスウェーデン議会は再び1院制へ復帰した。また，1988年のRiksbank Act改正などでリクスバンクの機構改革（Board of Directors → General Council; Board of Managers → Executive Board），印刷工場・製紙工場・造幣工場の売却，地方支店の廃止が行なわれた。従って最近の動きを理解するためには別途それらに関連した資料に当って調べることが必要であろう。